

令和2年度 校内研修について

平戸中学校研究・研修担当

1 はじめに

[校内研修の定義]

- ・学校が主体となって、教育目標の実現に向け、校長の指導のもと計画的、組織的、継続的に実施する研修
- ・教育目標の実現を目指した、教職員の小グループによる日常業務と結びついた研修
(小集団による研修 SGA ; Small Group Activities)

[校内研修の必要性]

- ・学校ごとに教育課題が異なるため、学校現場に即した実践的研修が求められていること
- ・山積みする教育上の諸問題に対し、校外研修だけでは不十分であること。また、校外研修は、場所、時間、参加人数の制限があること
- ・今後、ベテラン教職員の大量退職、経験の浅い若手教員の大量採用で、実践的指導力やコミュニケーション力、チームで対応する力などがより一層求められること

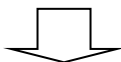
[校内研修の意義]

- ・学校の教育活動改善の原動力となること
- ・学校の組織力を向上させること
- ・学び合い、高め合うという同僚性や学校文化の形成に役立つこと
- ・教職員個人の力量を向上させること

(長崎県教育センター H25.3「校内研修のてびき」より)

「校内研修」 = 組織力と人間性を高める活動の基盤

(長崎県公立学校教職員研修体系要項より)



【RV-PDCAサイクルによる校内研修の推進】

(R=調査・分析、V=構想、P=計画、D=実践、C=評価、A=改善)

- ①R…現状把握と課題の焦点化 (強みと弱み)
- ②V…ビジョン共有 (学校経営方針：育てたい生徒像、高めたい学校像)
- ③P…学校経営方針等の共有
(学校経営方針に基づく校内研修にかかる重点努力事項や方策等)
研究組織の編成
研究テーマ設定 (学校経営方針を踏まえ、達成可能で成果が実感できるもの)
年間計画立案 (学校歴への位置付け)
- ④D…授業研究や課題研修の実践
- ⑤C…評価の実施 (学校評価との連動)
- ⑥A…改善策の検討 (研修の成果と課題の整理、次年度に向けた方向性の修正等)

2 令和元年度（昨年度）の研究主題

主体的に学び、対話を通して学力を身につける生徒の育成 ～ 協働的な学びを意識した教育の工夫 ～

3 昨年度の取り組み

(1) 主題設定の理由

(ア) 社会的背景から

学習指導要領では、「生徒に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を活かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむと共に、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を活かす教育の充実に努めなければならない。」とあり、学力の3つの要素を、

- ①「基礎的・基本的な知識・技能の習得」
- ②「これらを活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力など」
- ③「主体的に学習に取り組む態度」

としている。

また長崎県では、「新 学力向上のための三つの提案」として、

- ①「できた」「分かった」の笑顔があふれる授業
- ②「夢・憧れ・志」を共に育む家庭・地域との連携
- ③子供が成長する喜びを分かち合う職員室

を掲げており、平戸市も「高い志をもつひとづくり」を重点目標に、

- 「基礎学力の定着と向上」
- 「ICTの活用と英語教育の推進」
- 「特別支援教育の充実」
- 「主体的な読書活動の推進」
- 「不登校対策の推進」

を重点事項としている。

このことから、「基礎学力の定着」が急務であり、「主体的に学習に取り組む態度」を育成すること、そして、各教科で「言語活動の充実」を図り「思考力・判断力・表現力」を育成していくことが必要となる。

(イ) 生徒の実態から

昨年度の「全国学力・学習状況調査」や「長崎県学力調査」「市学力調査」などの結果をみると、本校生徒の学力は、全国や県と比較しても低い状況にあり、まだまだ基礎的・基本的な知識・技能が身につけているとは言えない。学力が低い要因の一つとして、学習への関心・意欲の低さが考えられる。全国学力学習状況調査でも、1日あたりの学習時間や教科の学習への関心・意欲は全国や県と比較しても低かった。更に、全国学力学習状況調査や県学力調査の国語の「根拠を明確にして自分の考えを書く」問題や、数学の「判断の理由を数学的な表現を用いて説明する」問題など記述式の問題で、正答率が低く、無回答率が全国や県と比較しても高い。そこで、学習規律を大切にし、意欲的に学習に取り組む、学習集団を形成し、学力向上を図りたい。また、ICTの活用や繰り返し学習を計画的に授業に導入し、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図りながら、言語活動の充実に取り組み、学力向上を図りたい。

(ウ) 学校教育目標及びめざす生徒像から

主体的に学び、確かな学力を身につけた生徒の育成に向けて研修を深めることによって、本校の学校教育目標「夢を語り、夢を追う生徒の育成」や、今年度の目指す生徒像である「主体的に学び、粘り強く取り組む生徒（知）」「きまりを守り、思いやりのある生徒（徳）」「心身ともに健康で、意欲に満ちた生徒（体）」のバランスのとれた生徒の育成につなげたい。

(エ) これまでの研究と課題から

本校では、学力向上に向けて、思考力・判断力・表現力を育成するための全教科共通の課題（「根拠を明確にして書く」）について、共通理解をすることができ、共通実践へとつながった。また、ルールとリレーションの確立を目指した学級経営、授業の進め方については、研修を通して意識することができた。各教科で取組をまとめたことによって、取組を振り返ることもできた。しかし、学習規律の定着が不十分な面もあり、「知識」が十分に身につけていない状況も見られた。

(2) 研究主題のとらえ方

「主体的に学び」とは

- ①学習ルールを守り、友達と協力し、協働的に学習に取り組む姿勢。
- ②問題や課題に主体的に取り組み、学力を身につけようと努力する姿勢。

学習ルールを守り、友達と協力し、協働的に学習に取り組む姿勢を身につけさせることによって、今よりもさらに生徒たちの「わかる・できる」が増え、さらに、授業と連動した家庭学習にもつなげることができ、学力向上が図られるものとする。

「確かな学力」とは

言語活動の充実を通して、身につける思考力、判断力、表現力のことである。その中でも特に、本校生徒の課題として「目的に応じて必要な情報を適切に、選択・処理・整理・分析し、根拠を明確にして、表現する（特に「書く」）ことができる力」があげられる。

また、思考力・判断力・表現力の育成のためには、基礎的・基本的な知識・技能の定着が必要である。そのために、各教科で、毎時間の授業で、繰り返し学習の場を設定し、基礎的・基本的な知識・技能を習得し、「目的に応じて必要な情報を適切に、選択・処理・整理・分析し、根拠を明確にして説明する（書く）ことができる力」をつけることが学力向上につながるものとする。

(3) 研究構想

(ア) めざす生徒の姿

- ①学習規律を身につけ、意欲的に学習に取り組む生徒
- ②基礎的・基本的、知識・技能を習得し、根拠を明確にして説明する（書く）ことができる生徒
- ③意見を発表したり、お互いの考えを述べたりしやすい雰囲気での学習集団の中で、進んで学習する生徒

(イ) 研究仮説と検証方法

【仮説】

日常の教育活動の中心は、各教科の授業（学習指導）である。授業とは、学校生活の基本であり、最も生徒と正面から向き合える時間である。ICT を積極的に活用し、生徒が直感的に分かる授業を展開していくことで、より信頼関係を築くことができ、学力が向上するであろう。さらに、授業と連動した家庭学習にもつなげることができるであろう。

①ルールの確立された学級集団の形成のために、全校で統一した学習規律を確認し、徹底していく。

生徒指導上においても、授業は大切である。全職員で「学習ルール」を確認して指導にあたり、ルールの確立された学級集団の形成を目指し、ルールが確立されているかどうかを実態アンケートで検証する。

②学習意欲向上のために「見通し」と「振り返り」の場を設定する。

毎時間の授業や、単元のはじめなどに「見通し」の場を設定し、学習の見通しをたて、目標を持たせる。また、授業の最後や単元のまとめとして「振り返り」の場を設定し、新たな学びへの意欲付けを行い、学習意欲が向上できたかどうかを実態アンケートで検証する。

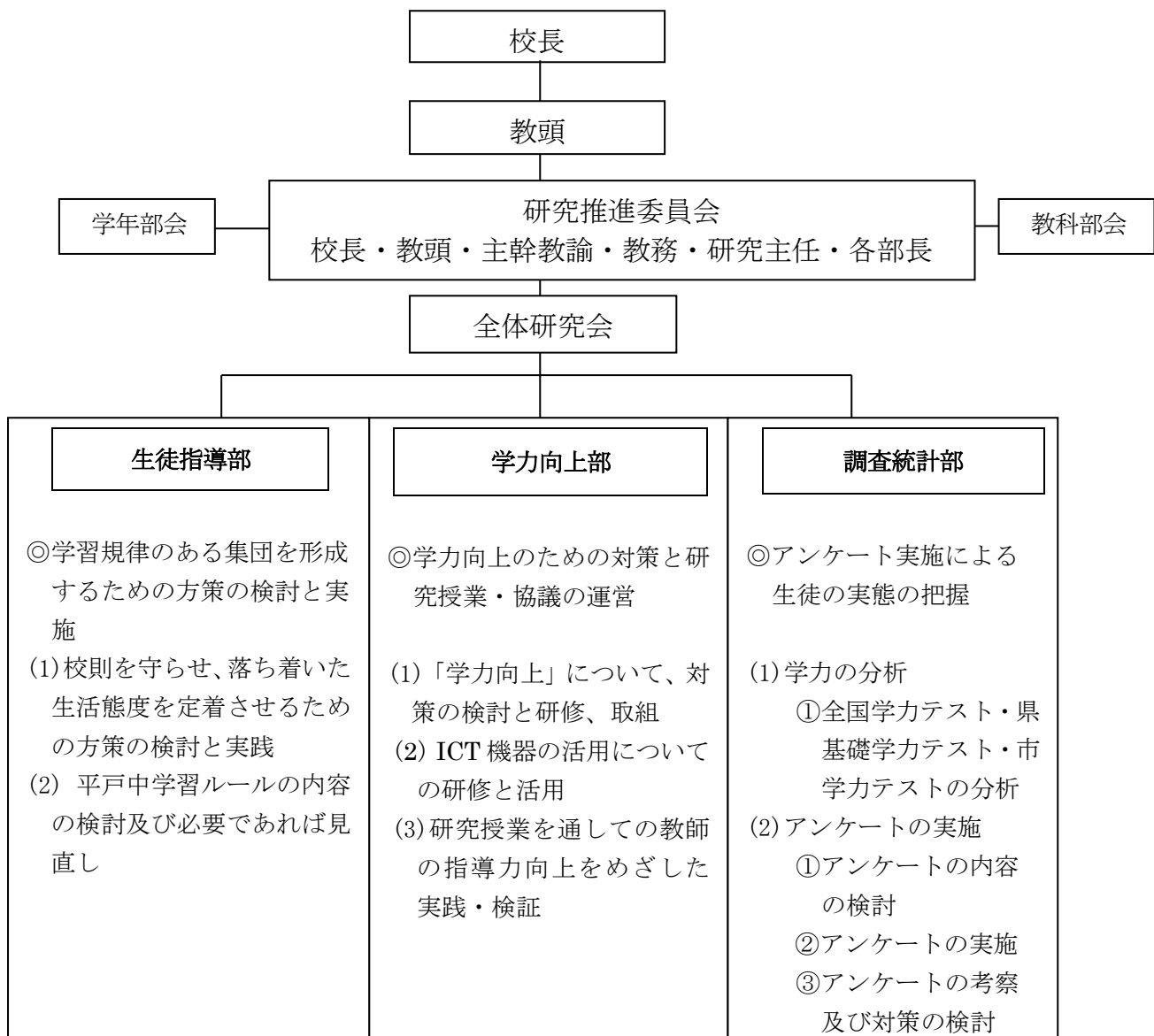
③全教科で、基礎的・基本的な知識・技能を習得させるために、繰り返し学習の場を設定する。

「思考力・判断力・表現力」をつけていくには、同時に基礎的・基本的な知識・技能を習得させていくことが重要である。その定着のために、繰り返し学習の場を設定し、基礎的・基本的な知識・技能が定着できているかどうかをテストや実態アンケートなどで検証する。

④わかる授業を展開するため、ICT 機器を積極的に活用する。

教科書や言葉だけでは伝えにくい内容などを ICT 機器を活用することを通して、「わかる・できる」授業を工夫する。実態アンケートにより検証する。

4 研究組織



学年所属

	生徒指導部	学力向上部	調査統計部
1年			
2年			
3年			

5 令和元年度 校内研修（昨年度実施分）

一学期	<ul style="list-style-type: none">・全体計画案・部長、年間計画、研究内容、指導案（略案含む）形式提案、学年代表授業者の決定・アンケート内容の検討、提案、実施・年間計画（研究授業計画含む）、各部会報告・研究授業1回・生徒指導に関する研修
夏季休業	<ul style="list-style-type: none">・アンケート結果、Q-U結果の分析・道徳に関する研修（評価）・生徒理解に関する研修（Q-Uの分析）
二学期	<ul style="list-style-type: none">・学力向上プランの検討、作成・人権に関する研修・研究授業8回・学力調査の結果分析・「学力向上プラン」の実践
三学期	<ul style="list-style-type: none">・研究授業2回・「学力向上プラン」の実践のふり返り・成果と課題についてのまとめ、次年度に向けて・紀要作成

6 各部会の活動計画（昨年度）

【生徒指導部】

(活動計画)	<ul style="list-style-type: none">◎チャイムと同時に授業開始○あいさつ・聴く耳・3分前入室1分前着席（学習の規律確認）の徹底○生徒会の考えたルールで学校が動くと、生徒自身が変わったなと実感できる○はじめと終わりのあいさつの声を大きく○まとめ、成果と課題
(具体策)	<ul style="list-style-type: none">○放送が多すぎるのでできるだけ使わない（緊急時のみ。生徒の呼び出し、授業の連絡等はしない）○生徒会と連携してもりあげていく

【学力向上部】

(活動計画)	<ul style="list-style-type: none">◎研究授業と授業研究並びに専門機関等を活用した校内研修の実施○研究授業実施時期及び教科アンケート○松元先生研究授業（道徳科）センターの出前講座と絡める○前川先生研究授業（理科）○まとめ、成果と課題
(具体策)	<ul style="list-style-type: none">○授業研究はK J法で行い、ローテーションでメンバーを変える。○学力向上に向けて、掲示板を用いて基礎的な問題を掲示したり、問題やワークシートを個別に配布したりすることができないか…という案が出た。

【調査統計部】

- (活動計画) ◎「新平戸中学学習ルール」をもとにしたアンケートの実施並びに分析
- 内容検討
 - アンケート実施、集計、結果提示
 - まとめ、成果と課題
- (具体策) ◎学習状況アンケートを生徒自身の振り返りにもする。
- 「新平戸中学学習ルール」をもとにした内容でアンケートを作成。
 - アンケートを6月、11月の2回実施する。
 - 第1回アンケートの結果を提示し、生徒指導部で具体策を話し合ってもらう。
 - アンケートの集計や結果は百分率で出す。

7 昨年度の反省

(1) 読解力（語彙力）を向上させる

読解力（語彙力）を向上させるためには、読む力を上げること、漢字力を上げることなど国語力を上げる試みが必要となる。問題を解かせても、問題を読めない、そこには漢字を読めないということも含まれており、問題そのものの意味がわからないことにつながっているため、教育活動全般を通して「読む」「書く」活動を引き続き取り組んでもらうことが必要である。

(2) 計算力を向上させる

今年度、「らんらんひらど計算検定」の7級に取り組ませたが、4か月という期間で行ったことは生徒の集中力も保たれた長さだったと感じる。トレーニング期間が長すぎるのも、よい結果にはつながらないと思われる。次年度は、前期（4月～9月）に1年生7級、2・3年生6級へ取り組み、後期（10月から2月）に1年生6級、2・3年生5級へと検定級を上げる取り組みも考えてよいのではないかと思う。

取り組み方にはいろいろな工夫が考えられるが、今年度、プレテストの合格者をマスターと位置づけ、不合格者とともに学びあう関係となる方法を取った。子どもたちの中に「やらされている」感があまりなく、「意欲的に取り組む」雰囲気作りがあったと感じた。

次年度も生徒の中に「教えあい学びあう」という方法を取りながら計算力が身に付いていくことが望ましい取り組み方だと、今年度の取組を振り返って感じるところである。

(3) 学習環境

廊下側の窓を目隠しシートで覆ったことは、子どもたちの集中力を保たせることに効果があったと考えられる。運動場側の窓も目隠しすることで、体育の授業等、グラウンドで活動していることに気を取られずに済むので、2・3年生の教室を優先に、早期の段階で目隠しシートを運動場側の窓に貼る方がよいと思う。

(4) 研究授業

今年度も、全職員参加の研究授業、授業研究を年間3回実施したことは職員の授業力向上にも役立ったし、ひいては子どもたちの学力向上につながったと思う。

授業研究から全職員が意識すべきことを探るためにも、次年度も継続して実施すべきだと感じる。

(5) 学習状況アンケート

アンケートを実施して、分析し、行動を起こして改善を図るには時間が必要である。1学期を通して子どもたちが感じる良し悪しを、9月から改善した内容に取り組み、12月に再度アンケートで確認することで学力向上へつながるものとした。今年度は、アンケート結果からポイントが向上したことまではわかったが、そのことで子どもたち自身が「学力アップにつながった」と感じたかどうかはわかっていない。そこを検証できるような取り組み方が必要だと感じる。

令和2年度の研究（仮）主題

主体的に学び、対話を通して学力を身につける生徒の育成
～ 協働的な学びを意識した教育の工夫 ～

「主体的・対話的で深い学び」は新学習指導要領が求めるものである。「主体的な学び」とは「学ぶことへの興味関心を持ち、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次の学びへつなげる」、「対話的な学び」とは「子ども同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方などを手掛かりに考えることなどを通じ、自己の考えを広げる」、「深い学び」とは「知識を相互に関連づけ、より深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう」と説明されている（平成28年度中教審答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」）。その実現に向け授業改善を行うことで、生徒同士が協働的に学びながら学習内容を深く理解し、資質・能力を身につけ、生涯にわたって能動的に学び続ける力を育む。「深い学び」の在り方は、教科等の特質に応じた「見方・考え方」に応じて示されるものであるが、「主体的・対話的な学び」の在り方は、教科共通で理解できる視点であると考えられる。

【仮説の一部】

平戸中生徒の学力向上のため、平戸中学校全職員がやるべきことを理解しやり遂げる。具体的には、授業や諸活動において生徒同士の協働的な学びの場を設定することで、生徒一人一人の「主体的・対話的で深い学び」が実現されるであろうと考える。